
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 184

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3661. 12音技法を用いた作曲とバッハからの学び
- 3662. ゆったりとした起床と今朝方の夢
- 3663. 引っ越しの夢
- 3664. 公園でのコーチングセッションとインタビューに関する夢
- 3665. 道(タオ)
- 3666. 時と成熟
- 3667. 土曜日の早朝より
- 3668. 『冬の霧 立ちて:パリの時』と今朝方の夢
- 3669. フリジアに続く道:生活拠点と精神の鍛練
- 3670. 監訳書の解説文の執筆完了
- 3671. 大海原を漂うボートと無人島に流れ着く夢
- 3672. 1セント足りない夢など
- 3673. 無調の曲からの学び
- 3674. 日曜日の終わりに
- 3675. 通っていた中学校のバスケットコートの上で
- 3676. 原画が持つ迫真性に関する夢
- 3677. 大自然に潜む隠れたコードと作曲
- 3678. 固有の時空間の12音技法
- 3679. 教育と創造
- 3680. 就職しようとする友人に関する夢

時刻は午後の五時半を迎えた。確かにまだ冬の真っ只中にいるが、日没時間が少し遅くなっていることに気づく。

今日は、昨日に届いた二冊の書籍、“Serialism: Cambridge Introductions to Music (2008)”と“Serial Music, Serial Aesthetics: Compositional Theory in Post-War Europe (2008)”を少しずつ読み始めた。まず前者に関して序文と第一章を読み終えた。とりわけ第一章の中には、12音技法を用いて作曲する手引きとなる解説があり、それは早速今日からでも活用できると思った。しばらくは、掲載されていた音列を活用して、何曲か曲を作ってみようと思う。後者の書籍に関しては、つい先ほど序文を読み、目次を眺めたりしていた。

本書を通じて特に私が理解したいのは、12音技法で生み出された曲の美の性質についてである。本書を通じて著者は、12音技法に関する美学に言及しており、そのテーマに関する論述は非常に参考になるだろう。

正直なところ、私はまだ12音技法で作られた曲に美を見出していない。おそらく私には、12音技法で作られた曲が持つ美を掴む観点がなく、また、そうした感性が育まれていないのだと思う。後者の感性を育むためにも、まずは観点を獲得し、実際に自分で曲を作っていく実践を積むことが重要になるだろう。上記の二冊の書籍を購入したのはまさにそのためである。

12音技法に関する様々な観点を得て、それを作曲実践に活かし、未だ未開発の自分の美的領域を開発していくこと。二冊の書籍を通じてそうしたことが実現されていくことを願う。

昨夜から、再びバッハの曲を聴いている。スヴァトスラフ・リヒテルの演奏するピアノ曲を今日はずっと聴いていた。それに合わせて、今日は午後に、バッハの曲を参考にして曲を作った。バッハの曲を参考にするときはいつも、「これは凄い・・・」という言葉が自然と漏れる。バッハの曲の構造、そしてそれが生み出す美の双方に対して、いつも感嘆の声を上げている自分がある。それは今日も例外ではなかった。

バッハの曲はどれも、それほど長くはないのだが、その構造が緻密なため、参考にする際には普段よりも作曲に時間がかかる。だが、仮に時間がかかったとしても、得られることが非常に多いことを考えると、バッハから学ぶことをやめたくはない。むしろ、明日からは再びバッハの曲を参考にすることに力を入れたい。調性のある曲に関しては、バッハをとにかく参考にしようと思改めて思った。それと合わせて、無調の曲も少しずつ作っていこうと思う。

夕食後に再び作曲実践を行う際にはモーツァルトに範を求め、就寝までまだ時間があれば、上記の書籍のどちらかを読み進め、さらにはゴッホの手紙も読み進めていきたいと思う。フローニンゲン：
2019/1/10(木)17:45

3662. ゆったりとした起床と今朝方の夢

今朝は非常にゆったりと七時半に起床し、八時から一日の活動を始めた。今、空がダークブルー色に変化し始めた。昨日と同様に、今日も曇りのようであり、午後からは少し小雨が降るようだ。明日はもっと雨が強いようなので、できれば今日の午後に、行きつけのチーズ屋に足を運びたいと思う。

気がつけば、今週も週末に近づいている。今日は平日最後の金曜日であり、今日の活動をどのようなものにしていくかを少しばかり考えていた。取り組む事柄の骨格は日々変わらないが、今日は監訳中の書籍に関する文章の執筆を行っていこうと思う。具体的には、「はじめに」と巻末の解説文のドラフトを作りたいと思う。

最終的な分量については編集者の方と改めて相談する必要はあるが、特に巻末の解説は長くなりすぎないように気をつけようと思う。今回の書籍は本文が極めて優れており、また、本文の説明も非常にわかりやすいものであることを考えると、本文の内容に対してさらに噛み砕いて説明をする必要はないと考えている。一方で、本文では書かれていない事柄、例えば、インテグラル理論や成人発達理論を具体的に活用している先駆的な組織の活動内容についてより詳細に紹介することや、インテグラル理論や成人発達理論の取り扱いに関する注意点などを盛り込んでおきたいと思う。

「はじめに」にせよ、巻末の解説にせよ、書き始めることによって、さらに執筆が必要な事柄などが見えてくると思うので、ワードにまとめている項目を見ながらまずは文章を書いてみて、さらに重要なこ

とを思いついた都度、それらも文章の中に組み入れていくようにする。それを今日の昼前と午後に行いたい。

今朝方は、いくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、大学時代に同じゼミに所属していた、ある一人の先輩と話をしていた。話をしていた場所は、屋外なのか屋内なのかわからないが、二人は空を見て仰向けになっていた。隣同士で仰向けになっていたのではなく、頭と頭が引っ付くような形で、一本の線のようになって仰向けになっていた。

私が何かを呟いたあと、先輩は一つの詩を詠んだ。私は黙って耳を傾け、ゆっくりと詠まれる詩の言葉の意味を一つ一つ味わっていた。すると、その詩が指す事柄が今の自分に強く響くものであり、思わず感動の涙を流した。先輩はそれを察したようであり、私に声を掛け、少しの間沈黙があった。

今となってはその詩がどのようなものだったかを思い出すことはできない。だが、自分の内側の奥深くに訴えかけてくるような内容を持つ詩であったことは確かだ。しばらく沈黙した後、先輩と私は立ち上がり、お互いの家に帰ることにした。途中、私はスーパーに立ち寄りたいたいと思い、そのスーパーが見えたところで、先輩には先に帰ってもらおうと思っていたのだが、その先輩はスーパーの前で待ってくれると言う。

先輩を外で待たせるのは少し気が引けたが、私はそのスーパーの中に入った。すると、確かにスーパーの入り口から入ったつもりだったのだが、そこはなんとアパレルショップだった。店員が私に挨拶してきたが、私は服を購入するつもりは一切なかったもので、店内を一周して足早に出口から外に出た。すると、先ほどのスーパーの正しい入り口を発見した。

ガラスの向こうに買い物をしている客の姿が見えたので、今度は間違いないと入り口の扉を開けた。今度は正しくスーパーに入れたようであり、店内を見ると、とても広々としており、同じ系列のスーパーの中でもこの店は特に品揃えが良いようだった。私は野菜売り場を見た後に、魚売り場に向かった。そこでは、パックに入れられていない様々な種類の魚がトレイの上に置かれていた。すると突然、魚介類が動く音が聞こえた。まだ命があるのかと思って魚たちを確認したが、どれも死んでいるようであり、どうやらその音は機械の音か何かだった。それを確認した時、夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/11(金)08:29

Various phenomena that are invisible to us are constantly pulsating. Gravity could be one of them. Groningen, 20:30, Friday, 1/11/2019

3663. 引っ越しの夢

時刻は八時半を迎え、空がだんだんと明るくなっている。完全に明るくなるのは後数十分ほどだろうか。完全に明るくなるとはいえ、今日は曇りであるから、それほど明るさを期待することができないかもしれない。

昨夜、一日の終わりを迎えようとしている時に、瞑想的な意識の状態にある自分に気づいた。それは夜の作曲実践を終えてからのことであった。そこから私は、作曲実践は自分にとって、瞑想実践に他ならないのかもしれないということを思っていた。今日も、自分にとっての瞑想実践である作曲に取り組んでいく。

昨日、バッハの曲を参考にすることによって、いくつも学びがあり、同時に曲を作る一段強い喜びを感じさせてもらったように思う。今日もバッハの曲を参考にし一曲作ろうと思う。

今朝方の夢の続きについて書き留めておこう。夢の中で私は、オランダの実際の自宅とは作りが少し違う、どこか別のマンションの自宅の中にいた。そのマンションの高さは、オランダの住宅にしては高く、室内のリビングを見ると、大変広々としていた。開放的な窓を通じて、外の景色が良く見える。

窓の外の景色を眺めていると、私はハッとするように、今日は引っ越しの日であったことに気づいた。時計を見ると、朝の九時であり、荷物の集荷は正午にやってくる。すると、呼び鈴が鳴った。ドアを開けてみると、そこには一人の小柄な外国人女性が立っていた。

彼女は引越し業者の方ではないが、何やら私の引越しを手伝うためにここに来たようだった。荷物の搬出は正午なのだが、まだ何も作業に取り掛かっていないことをその方に伝えると、その方は一瞬驚いた表情を浮かべたが、その後にはすぐさま笑顔になった。そこから私たちは、急いで荷物をダンボールに詰める作業に取り掛かろうとした。その前に私は、段ボール10箱のうち、3箱は日本に、

残りの7箱はアメリカに送ることは可能か、とその方に英語で確認した。すると、それは可能だという返事があった。

もちろん、オランダから異なる二拠点に荷物を送るため、料金は変わってくるということだったが、とりあえず二つの拠点に荷物を送れることは有り難かった。というのも、これから新しい生活を始めるアメリカに行く際には、できるだけ荷物を少なくしておきたかったからだ。特に、アメリカでの生活で読まないような書籍や論文に関しては、日本の実家に送っておこうと考えていた。二つの拠点に荷物を送ることが可能であると聞いて安心し、私はそこから一気に荷物の梱包を始めた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、クライアントのある会社の方たちと、ある雑居ビルの中で立ち話をしていた。そこには二、三名の方がいて、私たちはお互いの近況について話し合っていた。ふと私は、携帯からメールを確認しようと思った。メールを確認すると、そこにはいくつかの既読メールと未読メールが表示され、それらを見ると少し違和感があった。

というのも、数時間前にメールを開いた時にはなかったようなメールが既読メールになっており、先ほど既読メールであったはずのものがそこになかったからである。おかしいなと思ってメールアドレスを確認すると、なんとそれは私のアドレスではなく、今日の前で雑談をしている一人の方のメールアドレスだった。私は、なぜその方のメールアドレスにログインできたのかは分からなかったが、とりあえずログアウトをし、再び彼らと雑談を始めた。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/11(金)08:51

No.1562: A Mystery of an Ocean of Trees

The dawn is breaking. I thought that the darkness of an ocean of trees could be regarded as mysterious. Groningen, 08:37, Saturday, 1/12/2019

3664. 公園でのコーチングセッションとインタビューに関する夢

時刻は午前九時を迎えようとしている。まだ雨は降っておらず、薄い雲が空全体を覆っている。雲の多い日が相変わらず続いている。今日から一週間はこのような天気となるそうだ。

一日の活動をそろそろ本格的に始めようと思った矢先、そういえば、今朝方の夢にはまだ続きがあることを思い出した。夢日記を綴ることは、極めて重要なシャドーワークであるから、続きに関しても書き留めておきたい。

夢の中で私は、森のある公園で、クライアント先のある会社の方と話をしていた。その方は、私のコーチングを受けている方であり、今日はどうやら、公園のベンチに腰掛けて、森を眺めながらコーチングセッションをすることになっているようだった。いや、それを事前に二人で決めていたというよりもむしろ、偶然その公園でお互いが出くわしたため、それではそこでセッションをしよう、という流れになった。

森を眺めることのできるベンチに腰掛けて、コーチングセッションが始まった。こうした自然を眺めながら対話をしていくことは、非日常的な意識に私たちをいざなってくれ、いつも以上に自分の内面探求が進んで行く感じがする、とその方がセッションの冒頭で述べた。私もその点に同意しており、そこからはいつも以上にくつろいだ雰囲気の中でセッションが進んでいった。するとあるところで、その方が自分の楽器の演奏を見てもらいたい、と私に述べた。

私は「ぜひお願いします」とその方に伝えると、公園にいたはずの私たちは、畳が敷かれた一室の中にいた。そして、ふすまの向こうから着物を着た一人の女性が楽器を持って現れた。私の目の前には、三味線を持つクライアントの方がいて、その後ろには琴を持つ着物姿の女性がいた。二人は呼吸を整えた後、演奏を始めた。

クライアントの方の三味線の演奏は見事であり、しばし私はその音色に聴き入っていた。その方にとってみれば、こうした芸術表現も内面探求の一種なのだろう。コーチングのセッションの中に、こうした芸術的な要素を取り入れていくことの可能性を、その方は私に示してくれたように思う。

演奏の音色に聴き入っていると、あるところで突然、何か線が切れるような音が聞こえた。どうやら、女性が持っていた琴の線が切れてしまったようである。そこでその女性は立ち上がり、私たちに一言述べてから、ふすまの奥へと消えていった。クライアントの方は、その女性と一緒に音を奏でることができないことを一瞬残念がっていたが、そこからはまた三味線の演奏を一人で始めた。先ほどの音色とは異なり、少しばかりその音色が寂しそうだった。そこで夢の場面が変わった。

今朝方見ていた夢の最後の場面は、前の夢の場面で現れていた公園が舞台となっていた。私はその公園の脇に立ち、公園の周りをランニングしている人たちの姿を眺めていた。どうやら私は、公園の周りを走っている人たちの中から、クライアントの会社に勤めている方たちを見つけ出し、一緒に走りながら一人一人にインタビューをすることになっていた。幸いにも皆、走るスピードはそれほど速くなかったため、とりあえず私はクライアントの会社に勤めている方たちを見つけた都度、一人一人にインタビューをしていった。このインタビューは一回で終わりではなく、公園の二周目の際にはインタビュー項目を変えて、合計で二回ほど同じ人にインタビューをする必要があった。

ある若い女性の方と一緒に走っている最中、向かって右手には大きな病院があった。その病院の外観はとても綺麗であった。その病院は反対車線の通りにあったのだが、ちょうど病院の入り口が見える地点を走り去ろうとしている時に、その女性の方から逆に私に質問があった。

女性:「小中高時代に得意な科目はありましたか？」

私:「えっ。強いてあげるとするならば、体育と五教科でしょうか」

私がそのように答えると、女性は満面の笑みを浮かべた。私は、その方がなぜそのような質問をしたのかわからなかったが、とりあえずその質問に対して回答した。満面の笑みを浮かべたその女性は走る速度を上げ、そこでその方との一回目のインタビューを終えた。私は一旦そこで立ち止まり、次のインタビュー候補を見つけることにした。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/11(金)
09:18

No.1563:A Jocular Wind

A jocular wind blows, and its rhythm stimulates my élan vital. Living with a wind may be like this.
Groningen, 14:56, Saturday, 1/12/2019

3665. 道(夕オ)

時刻は正午を迎えた。午前中の仕事に一区切りつけ、そろそろ昼食を食べようと思う。

今朝方の夢の中で、私は大学時代の先輩が詠んだ詩に深く感動していた。夢の中の身体であるサトルボディーから涙がこぼれることの不思議さについて改めて考えていた。エネルギー体が涙を流すことへの驚きの感情があったが、むしろエネルギー体であるからこそ、感動の原形質をより強く受け取ることができるのかもしれないと思った。

偶然なのだが、実は昨夜の就寝前に、詩を書きたいという思いが湧き上がっていた。それは決して本格的なものでもなく、日々作っている曲に添える程度の詩について思いを馳せていた。そのようなことを考えていたことが、もしかしたら今朝方の夢に影響を与えていたのかもしれない。いずれにせよ、自分の内側で芽生えた、詩を作りたいという思いを大切に、厳密な詩でなくてもいいので、これから少しずつ詩作の道を模索したいと思う。作曲、絵画、そこに詩がいよいよ加わろうとしている。

日々の出来事をメモするように、日々の出来事から喚起された諸々の事柄を日記に綴っていくように作曲を続けていく。それ以上の目的はない。そのような考えを改めて持った。

今朝も一曲ほど作曲をした。午後からも十分な時間を取って、バッハに範を求めて作曲をしたい。

今天気予報を確認すると、幸いにも、今日は夜まで雨が降らないようなので、昼食後しばらくして仮眠を取ったら、行きつけのチーズ屋に足を運びたいと思う。

昨日の就寝前にも、少しばかりゴッホの手紙を読み進めていた。ちょうどゴッホが、ジャン＝フランソワ・ミレーに影響を受け、ミレーの作品を熱心に模倣している時期の日記を読み進めていた。ゴッホも自分の絵画技法を獲得するために、ミレーをはじめとして、様々な画家の作品を模倣していたのだ。

弟のテオに宛てた手紙を読むにつけ、ゴッホが絵画道(タオ)を歩んでいたことがわかる。絵画も音楽も、それに従事する者自身を涵養していくという点において、それらの実践は道(タオ)に他ならない。

ゴッホは手紙の中で、自分を捉えて止まない対象に対して小さなデッサンを無数に描いていった。小さな実践と小さな積み重ねが持つ価値と尊さについて改めて思う。作曲実践においてもそうだ。

日々小さな実践を積み重ねていくことが、いかに大切かを改めて肝に銘じる。一つの記事、一つの詩、一つのデッサンを描くように小さな曲を無数に作っていく。まとまりのある曲を作っていくのはその後の後、そのまた後だ。

とにかく無数の小さな曲を日々作り続けていくということ。それを長く継続していった先に、今の自分では全く想像できないような世界が開かれていくのだと思う。フローニンゲン:2019/1/11(金) 12:13

3666. 時と成熟

時刻は午後の七時半を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終えた。今日は一日を通して曇りがちであり、時に小雨がぱらつくことがあったが、ほんの少しの間だけ、太陽の光を拝むことのできる瞬間があった。今の時間帯はすでに闇が辺りを包んでおり、空には雲が多いが、時に月の面影を垣間見ることができる。ぼんやりとした三日月が、雲の隙間から顔を覗かせたり、引っ込んだりを繰り返している。

時をただ自らの成熟によって刻む。時をただ自らの成熟によって計測していく。夕方にそのようなことを思った。

今日という一日が、また自らの成熟に向けた一歩によって刻まれていった。今日という時を知るのは、自らの成熟だけなのだ。別の表現で言えば、これまでの自分の歩み、そしてこれらの自分の歩みと共にある時の流れというのは、自らの成熟によってしか明らかにならないものなのだ。

川を流れていく一枚の葉が流れたとわかるのは、その葉が流れたという歩みによってわかる。とても当たり前なことだ。葉が流れたことをもってして時が計測されていくのである。

今日も本当に始まってしまい、今日も本当に終わってしまうのだろう。それが幾分信じられない自分がやはり存在している。一日が始まること、一日が終わること。それに合わせて、自分が新たに始まり、その自分は終わりに向かっていくこと。この循環過程は、本当に驚愕に値する。

今日は、監訳中の書籍の「はじめに」を書き終えた。また、巻末の解説に関しては、いくつかの節に分けて文章を書くことにし、最初の節に関する文章を書き終えた。これから、その続きを書いていこうと思う。監訳者として、本書を通じて何を読者に伝えていこうかと色々と考えたが、やはり伝えるべ

きことはきちんと誠意を持って伝えておこうと思う。解説の最初の節は、自らの主張というよりも、まずは本文の補足として、インテグラル理論の応用事例について文章を書いていった。

これから執筆する箇所は、まさに自分が一番伝えたいことであり、同時に伝えるべき必要のあることだと思う。幾分瞑想的な意識状態にある今夜、少しばかり文章を書き足し、明日再び文章を書き足していきたい。明日に文章を書き足せば、その段階で筆を置くことができるだろう。あとは数日間文章を寝かせ、後日また文章に追加・修正を施していきたい。フローニンゲン:2019/1/11(金)19:44

3667. 土曜日の早朝より

今朝は六時前に起床し、六時半を迎える頃に一日の活動を始めた。一月を迎えてからの第二週の週末が今日から始まる。今日もまた、平日と変わらぬ取り組みに従事していく。

昨日は、監訳中の書籍に対する文章の執筆が予定通りに進んだ。今日は残りの執筆を進めていこうと思う。そこでは、私たちがいかような態度でインテグラル理論と接していく必要があるのかについて言及しようと思う。そこではもちろん、インテグラル理論のみならず、この理論の骨子でもある成人発達理論についても触れていく。

それら二つの理論をどのような発想と在り方で接していくのが望ましいのかについて、自分の考えを共有したいと思う。そうした文章を書きたいと思うエネルギーが湧いてきた時間帯を見て、文章の執筆を行おうと思う。おそらくそれは、午前中のどこかのタイミングか、午後の時間にやってくるだろう。

文章の執筆と並行して、今日も昨日に引き続き、12音技法に関する二冊の書籍“Serialism: Cambridge Introductions to Music (2008)”と“Serial Music, Serial Aesthetics: Compositional Theory in Post-War Europe (2008)”の二冊を読み進めていく。昨日、本書を読みながら、アーノルド・ショーンバーグとオリヴァー・メシアンのパiano曲に関する楽譜をまだ持っていなかったため、それらを購入しようと思った。すると、思っていた以上に楽譜が少ないことに気づいた。

メシアンに関しては60ページほどの薄い楽譜を見つけることができたが、ショーンバーグに関しては良いものを見つけることは難しかった。かろうじて見つけたものは、『6つのピアノ小品 op.19』と『ピア

ノ組曲 op.25』の楽譜であり、それらは別々かつ、一つ一つの分量は極めて小さい。メシアンメシアンの楽譜と合わせると、合計で三つほど良さそうなものを見つけたのだが、イギリスやドイツの書店からオランダに送ってもらえないことがわかり、今はそれらを購入する時期ではないのだと思って断念した。アメリカのアマゾンアマゾンを調べると、米国ではそれらの楽譜をかなり割安で購入できるようなので、仮にまたアメリカで生活を始めたら、その時に購入したいと思う。

今日も上記の二冊の書籍を読むことを通して、12音技法に対する理解を深めていこうと思う。こうした書物を読んで作曲できるようになるかといえば「No」だと思うが、こうした書物を読んで作曲技術が豊かになるかといえば「Yes」だろう。これらの書物は、作曲上の観点を与えてくれるものであり、音楽に関する造詣を深めてくれる。そうした積み重ねが、ゆくゆくは自分の作曲技術に大きな影響を与えることになるのだと思う。

今日も作曲実践、過去の日記の編集、日記の執筆、読書、そして監訳の仕事を旺盛に進めていこうと思う。フローニンゲン:2019/1/12(土)06:38

No.1564: Flicker of a Crescent Moon

What I think of on a dark night is about a flicker of a crescent moon. It may be a pulsation of the life of the moon. Groningen, 20:53, Saturday, 1/12/2019

3668.『冬の霧 立ちて:パリの時』と今朝方の夢

時刻は午前七時を迎えた。今、コーヒーメーカーが音を立て、一日分のコーヒーが出来上がったことを告げた。

普段は早朝に、一日の活動内容に対する大まかな計画を日記として記し、朝方に見ていた夢を振り返るようにしている。しかし今朝は、今日の活動に関する計画に言及した後に、昨夜から読み進めていた『冬の霧 立ちて:パリの時』に自然と手が伸びた。昨日ふと、他者が書いた日本語が読みたくなり、とりわけ小説家の辻邦生先生辻邦生先生の日記が読みたくなった。そこで思わず手が伸びたのが上記の書籍だ。私はてっきり、この書籍をすでに一度読んだものと思い込んでいたのだが、書籍を広げると、まだ一度も読んでいないことに気づかされた。本書は、辻先生が1980年台の前半にフ

ランスに滞在していた時の日記が掲載されており、同時期の日記が収められたものとしては他に、『夏の光満ちて』と『春の風駆けて』がある。

それら二冊についても所持しており、今改めて二冊の中身を確認してみたところ、どうやらそれらの書籍もまだ一度も読んだことがないようだった。というのも、辻先生の日記を読むときには、必ず何かしら気づきや発見事項があり、それを余白に書き留めておくことが普通であり、それらの書籍にはそうした書き込みが一切なかったからだ。

それら三部作の中で、なぜ昨日、『冬の霧 立ちて』を手を取ったかという、それは言わずもがなだと思う。今から40年前、辻先生がフランスの冬をいかように過ごしていたのかに関心を持ち、辻先生の文章を頼りに、私もこの冬を過ごしていこうと思ったからである。

今朝も少しばかり辻先生の日記を読み進めていた。午後にも時間を見つけて、続きを読み進めていきたい。

早朝の作曲実践を始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、小中学時代を過ごした社宅の階段にいた。ちょうど二階から三階に上がろうとしている時に、二階に住んでいた奥さんが地上から私に声を掛けてきた。私はその場で立ち止まり、その方が階段を上っていくのを待った。

その方は開口一番、「外に出かける時は日焼け止めクリームを塗った方がいいよ」と私に述べた。確かに、外の日差しは強かったので、次回以降は日焼け止めクリームをきちんと塗っておこうと思った。すると、その方が住む二階の部屋に案内され、玄関から中に入ってみると、そこは大浴場だった。見るとそこには、小中学時代の友人である男女が数名、当時の面影を残したまま、水着を着て遊んでいた。一人の友人が、斜めに降り注ぐ、勢いの強いシャワーに逆らって歩く遊びを行っている姿が目にとまった。私もその遊びに加わろうと思ったところで、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は学校の校庭にいた。どうやらそれは、実際に通っていた中学校の校庭だった。同じ学年の生徒全員が校庭に整列しており、私は向かって左列に並ぶことになっていた。他の列と同様に、私が並ぼうとする列も、本来いるはずの生徒がそこにおらず、私はそれを不思議に思っていた。見ると、先頭に並んで生徒の数を確認する役割の人間がいないようであったから、私は列

の先頭に行き、後ろを振り返って、列にいない人間が誰かを確認した。生徒の列の前には、数学を担当していた女性の先生が、机と椅子を校庭に持ってきて、机についていた。

私は先生のところに行き、誰が今いないのかを伝えた。すると先生は、誰がどのような理由でここにいらないのか、そして何時間目にやってくるのかを逐一メモし始めた。私は誰がいらないかまではわかったのだが、どのような理由でここにいらないのかまではわからず、ましてや、いつ彼らが来るかまではわからなかった。とりあえず、そこにいる生徒たちの情報をもとに先生に報告をした。

私の報告に先生も納得したようであり、私がお金を借りていたそうね。それを返すためにOOさんは今いないのじゃないかしら」と述べた。

先生が言及した男子生徒は、私の友人でもあり、大変性格が良く、気前もいい。確かに、彼ならお金を貸すこともあるだろう、と私は思った。そこでもう一度、男子だけが並ぶ列と女子だけが並ぶ列を確認してみたところ、先生が言及した二人はそこにはいなかった。フローニンゲン:2019/1/12(土)
07:37

No.1565: A Tail of a Bluish Black Dragon

The weather at this moment looks like a flying bluish black dragon. I can see some little birds following the tail of the dragon. Groningen, 08:45, Sunday, 1/13/2019

3669. フリジアに続く道:生活拠点と精神の鍛練

時刻は午前11時を迎えた。数時間前から雨が降り始め、今もまだ雨が天から降り注ぎ続けている。

つい先ほど、フローニンゲンで生活をして三年が経つというのに、書斎から見える目の前の通りの名前を知らないことに気づいた。通りの名前を私は早速調べてみた。すると、目の前の通りは、「フリジアン通り」という名称であった。フリジアというのは、フローニンゲンから西に行ったところにある地名であり、そこはオランダ語のみならず、フリジア語という独特の言葉を公用語として生活をする人

たちが住んでいる。もしかしたら、目の前の通りは、「フリジアに続く道」という意味で「フリジアン通り」と名付けられたのかもしれない。

今日も相変わらずの天気悪さだが、こうした気象条件の厳しさが、自らの精神を鍛練して行ったことについて先ほど考えていた。ちょうど先ほど、窓際に近づき、ぼんやりと外を眺めていると、昨年の夏に訪れたヘルシンキの記憶が蘇ってきた。ヘルシンキのホテルでサウナに入っていた時の自分を思い出したのである。

そこから私は、この七年間の欧米生活は、サウナから水風呂に入り、水風呂からサウナに入りといったように、気候条件が極端に異なる地域を転々としていることに気づいたのである。特に、サンフランシスコからニューヨークに移り住んだ時の記憶、ニューヨークからロサンゼルスに移り住んだ時の記憶、ロサンゼルスから一年間日本を経由して、北欧に近いこのフローニンゲンにやってきた記憶が自然と思い出された。

こうした生活環境がまるつきり異なる地域を転々とするに依りて、そのたびごとに、自ずから精神が鍛練されているように思えたのである。環境が人を育むということを強く実感する七年間だ。私はそれぞれの居住地で、そこでしか育まれぬものに触れ、それを通じて自己を涵養してきたのだと思う。今年の夏からは再び生活拠点を換えようと思っており、次の生活拠点がいかなる場所であったとしても、私はまた、その土地でしか育まれぬものに触れ、それを通じて自己を育んでいくことになるだろう。そのようなことを先ほどぼんやりと考えていた。

昼食までの時間を使って、辻邦生先生の日記の続きを読み進めていこうと思う。先生の日記を読みながら、改めて、自らの日本語をもっと鍛練していく必要性を感じた。それは自らの文章を書くことでしか鍛えられないのと同時に、自己そのものをさらに深めていくことでしか成し遂げることのできないものである。絶えず日記を執筆し、自己と日本語の双方を涵養していく試みにこれからも従事し続けていく。

こうした営みは、多かれ少なかれ、必ず自分の作曲技術の涵養にもつながってくるはずだ。なぜなら、作曲とはまさに、自分の存在を通してなされるものであり、生み出される曲は自己を映し出すものに他ならないからである。自らの日本語を涵養していくこと、自らの作曲語法を確立することの双

方において、結局は自己をより深めていくことが重要になるということに改めて気づかされる。フローニンゲン:2019/1/12(土)11:22

No.1566: A Dance of a Pigeon with Purplish Plumage

A pigeon with purplish plumage is beautifully dancing. Groningen, 12:01, Sunday, 1/13/2019

3670. 監訳書の解説文の執筆完了

時刻は午後の八時を迎えようとしている。午前中と午後に降っていた雨は止み、今はとても静かな世界が外に広がっている。

今日の夕方に、無事に監訳書の解説文のドラフトを書き上げた。「はじめに」に関しては昨日にすでにドラフトを書き上げており、今日は巻末の解説文の執筆に集中していた。字数にして5,000字ほどの解説となった。おそらくこの分量は少なすぎず、多すぎずといったところだろう。最終的な分量は、編集者の方に後日相談する必要がある。以前の日記で書き留めていたように、本書の本文は非常にわかりやすく、本文の内容に対する補足説明のようなものはほとんど入らないと判断した。

その代わりに、そもそも私たち一人一人がどのような態度でインテグラル理論と接するのかがの方が重要であると思い、そのテーマに関する文章を中心にして執筆をしていった。とりあえず来週一週間は文章を寝かせ、その後、再び全文のレビューを行い、そこから再度自分の文章に追加・修正を加えていくことにする。原稿のレビューと解説文の執筆の締め切りは今月末であるから、まだ十分な時間がある。再度全ての文章に目を通すことと、自分の書いた文章に改めて追加・修正を施すことを行いたい。

今日は午前中に、辻邦生先生の日記を読み進めていた。早朝に私は、この日記をまだ一度も読んだことがないと述べていたが、実際にはそれは正しくないことがわかった。本書をくまなく見ると、あるページには下線が引かれていたり、書き込みがなされていたりした。確かに、全ての文章を最初から最後まで読み進めていないようなのだが、ところどころ文章を読んでいたようなのだ。いずれにせよ、明日もまた時間を見つけて、辻先生の日記を読み進めていきたい。

改めて、辻先生が持っていた、現実社会を冷静に見る目には感銘を受ける。辻先生の言葉で言えば、「既存の存在様式への批評」を絶えず意識しながら文章を書いていたことが窺える。自分を取り巻く社会の諸々の枠組みに対して自覚的になれるというのは、ウィルバーの発達理論で言えば、ヴィジョン・ロジックの力が求められる。おそらく辻先生は、そうした力を持っており、そうした力を持って時代の課題を的確に捉えていたがゆえに、今先生の日記を読んでも参考になることが多々あるのだと思われる。

今日はこれから、本日を締め括る作曲実践を行う。モーツァルトに範を求めて作曲をし、時間があれば、12音技法を用いた曲を作っていこうと思う。本日も、12音技法に関する書籍を読み進めており、それを読む中で、今後の作曲上のヒントを得た。当面は、非常に短い曲を12音技法で作ってみる。それこそ、8小節、ないしは16小節ぐらいの短い曲で十分だろう。

12音技法でメモを書き留めるような感覚で、あるいは、短文を作る感覚で、この技法に習熟していく。ただし注意したいのは、12音技法で作られる短文に一つの意味、ないしは主題を明確に与えるということである。そうしたことを意識して今日からの作曲を行いたい。フローニンゲン:2019/1/12(土)
20:13

No.1567: A Dance at Dusk

Black clouds are moving toward somewhere. Keeping step with it, today is approaching the end.
Groningen, 17:40, Sunday, 1/13/2019

3671. 大海原を漂うボートと無人島に流れ着く夢

時刻は午前七時に近づきつつある。起床直後から雨音が聞こえており、今も雨が降り続けている。今日は夕方まで雨が降り続けるようだ。

窓ガラスに打ち付ける雨の音を聞きながら始まる日曜日の朝。幸いにも、昨日の段階で、監訳書に寄せる文章のドラフトが完成したため、今日は文章を執筆する仕事はない。一方で、昼食後に協働者の方とオンラインミーティングが一件ほど入っている。その他には特に仕事はないので、今日も探究活動と創造活動の双方に十分な時間を充てていこうと思う。

雨音を聞きながら、今朝方の夢について少しばかり思い出している。夢の中で私は、大海原を漂うボートの上にいる。周りは見渡す限り海であり、陸地などは一切見えない。

ボートの上には、私以外に四人ほどのアメリカ人が乗っていた。一人は女性、残り三人は男性だった。全員年齢がバラバラであり、私たちがなぜこの一台のボートに乗り合わせているのかは不明だった。私たちはしばらく、雑談をしながら海の航海を楽しんでいた。しかし、突然天気が変わり、激しい嵐がやってきた。

乗っているボートは、どこにでもあるような、本当に普通のボートであり、嵐の強さによっては転覆してしまう恐れがあった。そして案の定、嵐が強まった時に、ボートは転覆してしまった。私たちは大海原に投げ出されてしまったのだが、不思議と嵐が止んだ。私たち五人は、投げ出された場所からボートに向かって泳いで行こうとした。

すると突然、巨大なサメの背びれが見えた。後ろから迫ってくるサメに、私たちは恐怖を感じていた。だが、メンバーのうちの唯一の女性は冷静であり、かつたくましく、「サメを撃退する術を知っているから大丈夫だ」と私たちに声をかけた。どうやらサメが嫌がる臭いを発するものをポケットに携帯していたらしく、それを海中に沈め、さらには私たち五人が輪になっている円周の周りに振りかけて行った。

すると、それは白い煙のようなものを立て始めた。サメがいよいよこちらに迫ってきた瞬間に、サメはピタリと動きを止めた。どうやらその女性がまいたものは効き目があったようだ。ボートまであと少しとなったところで、一人の男性が衰弱のためか溺れそうになったが、隣にいた男性が溺れそうな男性の体をなんとか海中から引き上げ、二人は肩を組みながらボートの方に向かっていった。

その間にも、サメはずっと私たちの周りにいて、一人でも溺れて海中に沈んでいったら襲うような気配を見せていた。しかしそれも杞憂に終わり、私たち全員は、なんとかボートの上に引き上げることができた。全員がボートの上に戻ってきた時、これ以上ないほどの安堵感が漂った。

すると、空は晴れ渡り、私たちは気がつけば、無人島に流れ着いていた。無人島の浜にボートが流れ着き、私たちは助けを待たために、しばらくこの島で生き抜いていくことになった。見ると、一人の男性が砂浜で山を作って遊んでいる。その脇に、なぜだかジュースの販売機があった。それは缶

ジュースが出てくるようなマシンではなく、ボタンを押すとジュースが流れ出てくるようなマシンであった。その男性は、砂浜で山を作っている間に、マシンに残っていたオレンジジュースを絞り出しているようだった。

地中にストローのようなものが埋め込まれており、ストローの先が地面に置かれたコップの上に来るようになっており、海水がこしられたものがコップの中に滴り落ちるような仕組みになっていた。見ると、随分とオレンジジュースがたまっており、私の左横にいた女性と私は、そのオレンジジュースを飲んでみることにした。

すると、それは非常に美味しいオレンジジュースであり、私たちの体を潤すかのようにであった。オレンジジュースを絞り出す注ぎ口の左横には、別の種類のオレンジジュースを絞り出すことができるようだったが、そちらは使われていなかった。オレンジジュースを飲むことによって随分と気力が溢れてきたような感覚になったところで、夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/13(日)07:13

No.1568: A Knock of Darkness

I can hear a wind like a rumbling of the earth. It is knocking at tomorrow. Groningen, 20:48,
Sunday, 1/13/2019

3672. 1セント足りない夢など

雨脚が少し弱くなり、窓ガラスに打ち付けるような音がほとんど聞こえなくなった。その代わりに、窓ガラスを滴る雨滴が見るようになった。

今、一日分のコーヒーを作っている。今日も午前と午後一杯ずつのコーヒーを飲みながら、自分の取り組みに従事していこうと思う。

昨日に引き続き、辻邦生先生の日記を読んだり、12音技法に関する専門書を読んでいこう。夜には、気になった画集を手にとって、それを眺めることをしたい。絶えず芸術に触れながら、自己を育んでいくことを継続していきたい。

今朝方見ていた夢の続きについて、今改めて振り返っている。夢の中で私は、見知らぬ駅の中にいた。その駅は比較的モダンな造りになっていて、どうやらその駅はアメリカにあるようだった。これから私は友人とどこかに向かうことになっていた。

その友人は、駅のプラットフォームで待っており、私はこれから切符を買って、プラットフォームに向かおうとしていた。切符売り場に到着し、いざ切符を購入しようとしたところ、手元には小銭がほとんどないことに気づいた。見ると、お札に関しては一枚も入っていなかった。

チケットの代金は4ドルなのだが、私の手元にある小銭を絞り出してみると、なんと1セント足りなかった。「これは困ったぞ・・・」と私は思った。そこで誰か近くにいる人に1セントを恵んでもらおうと思い、後ろを振り返った。するとそこには、三人の若い中国人か韓国人がいて、彼らに“Excuse me”と話しかけたところ、私がまだ次の言葉を何も言っていないのに、三人は首を横に振り、“No”の意思表示をした。

これは他の人に声をかけても無理かもしれない、と思っていたところ、切符売り場の近くにあった無料雑誌置き場のボックスの上に、1セントが置かれているのに気づいた。私はその偶然に感謝をし、1セントと手持ちの3.9ドルで発行した切符を持って、急いでプラットフォームの方に向かった。そのプラットフォームは地下にあり、私は傾斜の緩やかな坂道を急いで降りて行き、なんとかプラットフォームに到着した。するとそこには、大きなスーツケース一個と、私の小さなスーツケースを持っていた友人が待っていた。「待たせてごめん」と私は早口で述べ、ちょうど到着していた列車に二人で急いで乗り込んだ。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、サッカーの大人の日本代表のメンバーと、小学生ぐらいの日本代表の少年たちが、二つの列を作って対面になって語り合っている光景を目撃した。というよりも、私自身が少年側の列の一番端に並んでおり、日本代表の選手たちと少年たちと和気藹々と話をしていた。少年たちは皆立っていたのだが、私はなぜだか、膝をついており、隣の少年と私の目線の高さは同じぐらいだった。そこで私が膝をつくのをやめ、すっと立ち上がると、隣にいた少年はびっくりしたようだった。というのも、彼は私と同じぐらいの身長だと思っていたようだったからだ。立ち上がってみると、少年の中には大きな子もいたが、基本的に皆小さく思えた。

列の右端から真ん中の方に移動していくと、そこで一人の代表選手から、「あれっ、加藤さん、随分と脚が細くなりましたね。それじゃあダメですよ」と笑いながら言われた。それに対して私は、「いえ、今はオフシーズンですから」と笑いながら答えた。実際には、その時はオフシーズンではなく、国際大会に出場している真っ最中だったのが、私はそのように冗談を述べた。そこでふと、先ほどから自分は何か口に含んでいることに気づいた。それは噛み切れない食べ物のようにあり、私はトイレに行ってそれを吐き出そうとした。ちょうど私たちが並んでいる場所の近くにトイレがあり、そこに行くと、そこはとてつもない汚いトイレだった。とりあえず、今噛んでいるものを吐き出そうと思って個室のドアを開け、トイレットペーパーを引き出していると、そのトイレットペーパーも汚いことがわかり、そこで夢の場面が変わった。

最後に見た夢はとてつもない短い。私はある著名な日本人の学者の方と一緒にリゾート地において、二人で会話をしていた。その学者の方は、原発の問題を指摘しており、実はこのリゾート地も放射線にさらされるリスクがあるということを私に説明してくれていた。その学者の方は、放射線のリスクに関して随分と力説をしてくださり、説明がすべて終わったところで遠くの空を眺めると、そこには赤紫色の美しい夕焼けが広がっていた。フローニンゲン:2019/1/13(日)07:45

No.1569: A Beat in the Early Morning

The beat of my heart resonates with that of the earth. Although a strong wind is blowing outside, it does not excel the strength of the two beats. Groningen, 08:17, Monday, 1/14/2019

3673. 無調の曲からの学び

時刻は午後の二時半を迎えた。つい先ほど仮眠を取り終え、これから午後の活動を始めようと思う。今日も相変わらずの天気であり、先ほどはまたしても雨が降っていた。今は雨が止んでいるのだが、幾分風が強そうである。裸の街路樹が、木枯らしに揺られている。風が強い日に、街路樹はどこかに身を隠すこともせず、ただそこにあり続けている。凜として、そこにあり続けている街路樹の姿を私は眺めている。

午後の作曲実践として、これからまずはバッハに範を求めて作曲実践を行いたい。昼食前に、12音技法に関する専門書を参考にして、一曲ほど曲を作った。その際には、書籍に掲載されている音

列を活用し、具体例として一部か切り取られている楽譜をいくつか眺めながら曲を作っていた。先日、12音技法ないしは、無調の曲が収められた楽譜はないかと探していたのだが、あまり良い楽譜を見つけることができなかった。もちろん、個別の楽曲の楽譜を購入することはできたのだが、私としてはまとまりのある楽譜を購入したいと思っており、望むようなものがその時にはなかった。

そうしたこともあり、無調の曲を作る際には、書籍に掲載されている断片的な楽譜を参考にして曲を作るようにしている。しばらくはこうした形で実践を続け、また近い将来に、正式な楽譜を購入したいと思う。先日見つけたメシアンとショーンバーグの楽譜はオランダに郵送してもらうことが難しいようだったので、また別の国に住んだ時にでも購入しようと思う。

昼食前に無調の曲を作っている際には、それこそ本当に手探りの状態であった。今読み進めている専門書も、12音技法に関する学術的な解説書であり、決して作曲技法に関する指南書ではないため、自分で試行錯誤して曲を作っていく必要がある。これは12音技法に限った話ではないと思うが、この手法に関しては特に試行錯誤を要するだろうと思われる。一方で、こうした試行錯誤があるからこそ、12音技法を活用する妙味があると言えそうである。

また、調性のない曲を作っている最中には、これまで自分が慣れ親しんでいた調性のある世界から自分を引き剥がすかのような感覚がある。それは自分のこれまでの作曲経験で積み重ねてきたもののみならず、耳として慣れ親しんでいる調性のある音楽からの脱皮を促すかのような感覚だ。ショーンバーグや他の現代音楽家が見出したように、調性のない音楽世界には固有の感覚があるようだ。そうした感覚を養っていくことは、自分の作曲の幅を広げてくれるだろう。数多くの実験をして、試行錯誤をしながら実際に曲を作らないことには何も始まらないので、今後も少しずつ調性のない音楽を作っていこうと思う。

最後に、いつも作曲実践を終える際には、その曲を繰り返し聴きながら、曲から喚起される感覚を作曲ノートに絵として表現している。昼食前に無調の曲を作った時にも同様のことを行っていると、普段調性のある音楽を作った後に描く絵とは随分と雰囲気異なる絵が生まれた。この点も非常に興味深く、12個全ての音を使う12音技法が、固有の感覚を自分に引き起こしているからなのだと思う。フローニンゲン:2019/1/13(日)14:44

Shiwasu, which is December to describe busy time at the end of the year, already passed, but our life could always pass like that way. Groningen, 15:57, Monday, 1/14/2019

3674. 日曜日の終わりに

時刻は午後の七時半を迎えた。つい今しがた、本日の夕食を摂り終えた。

早朝から降っていた雨は夕方に止み、今はとても静かな夜が広がっている。書斎の窓の外から天を仰ぎ見ると、そこには三日月が浮かんでいた。

午後の四時を過ぎると、辺りはもう暗くなり始めることには変わりなく、黒い雲が空をゆっくり移動していく様子を眺めていた。それに歩調を合わせるかのように、今日が終わりに向かっていくことを実感している自分がいた。

今日も探究活動と創造活動に打ち込むような一日であった。「靈感が降ってきても来なくても、常に書く」というスタンダードの信条に自分も従う日々が続く。それは辻邦生先生が従っていた信条でもある。

今日も午前と午後に、辻先生の日記を読んでいた。先生にとってはおよそ20年越しの二度目のフランス生活に関する日記を食い入るように読み進めながら、いろいろ思うことがあった。それらについては、今後少しずつ言葉にしていこうと思う。

今日はこれから、昨日に完成させた監訳書の原稿に少しばかり手を加える。入浴中に、一つ付け足しておくべき事柄を思い出し、それを書き足しておこうと思う。その後、本日を締めくくる作曲実践を行う。今日はすでに三曲ほど曲を作っており、これが本日四度目の作曲実践となる。今は諸々の仕事があるため、平均して一日に三曲しか作れていないが、数年後には、自分の創造活動により集中するような環境を作る予定であり、その時には少なくとも毎日四曲ぐらいは作っているのではないかと思う。当然ながら、数の問題ではなく、自分の内側で形になることを待っているものに対して、適切な形を絶えず与え続けていくことが重要な点となる。

今日はまだ時間も残り、なおかつ、内側から形になろうとする何かがあることが分かるため、監訳書の原稿に文章を加筆したら、作曲実践に取り組みたい。それでも少しばかり就寝まで時間があるだろうから、12音技法に関する書籍を読んだり、ゴッホの手紙を読んだりしたいと思う。

今日は、12音技法を活用して一曲作ってみたが、やはりこの技術を活用した曲が多数収められている楽譜が手元に欲しいところである。ちょうど先日、上の階に住むピアニストの友人と階段で出会って立ち話をした。もう少し気温が暖かくなり、春にでもなったら、彼女が音楽院に練習に行く際に同行して、音楽院の図書館に入れてもらおうかと考えている。一週間に一日、ないしは二日ほど、図書館で実際の楽譜を見ながら作曲をすることができれば幸いだ。そのようなことを先ほど考えていた。フローニンゲン:2019/1/13(日)19:43

3675. 通っていた中学校のバスケットコートの上で

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を始めた。今朝は雨は降っておらず、今日は太陽の姿を拝むことができそうだ。ちょうど食料の買い足しに行こうと思っていたので、昼食前に近所のスーパーに立ち寄る際は、太陽の光を浴びれるかもしれない。天気予報を確認すると、今週末からいよいよ寒くなるようだ。

今回の冬は過去二年に比べると、非常に暖かく、今週末からの寒さはようやくといったところだ。気温がぐっと下がる時には、もう少し晴れの日があったと思うので、寒さを取るか、暗さを取るかの難しいところだ。今の私は寒くても晴れの日があった方が嬉しく思う。

いつもと同じように、早朝のこの時間帯は、今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、実際に通っていた中学校の屋外のバスケットコートの上でいた。そこで一人の友人とバスケをしていたのだが、気がつくと、その友人はもうその場になかった。私はコートの上に残り、一人でシュート練習を続けていた。

しばらくして、少し休憩のためにコートの上で休んでいると、中学三年の時にお世話になっていた体育教師が野球グラウンドからバスケットコートの方に向かって歩いてきた。野球グラウンドの隅に車を止め、車から何か小さな荷物を取り出し、それを持ってこちらに向かって歩いてきていた。

私が学校を卒業してから随分と時間が経ち、その間に、卒業生であっても学校内に入っただけではないような決まりができたようだった。以前、友人とバスケットコートで遊んでいたことがあり、その時にはその体育教師に注意されたのを思い出した。そのようなことを思い出しながら、私はコートの上で静かに佇んでいた。先生はどうやら私のことに気づいていないのか、校舎に向かって歩き続けている。

すると、校舎の窓ガラスに自分の姿が映ったのか、そこで初めて私の方を向き、「早く帰れ」とだけ一言述べた。私は、バスケ部が外で練習をしていたら、OBかつコーチとしてバスケと一緒にしようと思っていたのだが、学校側からはやはり歓迎されていないようだった。私は幾分憤りの混じった気分になり、「こうした閉鎖性がこの学校をダメにしている」と思った。先生から「早く帰れ」と言われた時には、そろそろ私も帰ろうと思っていた時だったので、コートから立ち去ろうとした。

練習の間に、誰かが私に贈り物を三つも贈ってくれていたようであり、それらが校舎の壁際に置かれていた。私はそれらを忘れずに持ち帰ろうと思い、それぞれ大きさの異なるお洒落な紙袋を三つ掲げて、靴箱の方に向かっていった。そこで偶然、部活の後輩に出会った。彼は私よりも一学年下であり、彼もすでに卒業して随分と立つはずなのだが、なぜかまだこの中学校に通っているかのようであった。そこで彼は突然、なぜか敬語ではなく友達であるかのように私に話しかけてきた。それに対して違和感を感じたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/14(月)06:54

No.1571: A Dark Night Ceremony

Most people are so genius so that they can limit themselves and deceive themselves for their life.
Groningen, 21:17, Monday, 1/14/2019

3676. 原画が持つ迫真性に関する夢

窓の外に広がる静かな闇の世界を眺めながら、今日のこれからの活動について少し考えていた。考えるまでもなく、今日もいつもと変わらない活動に従事していくのだが、具体的に何に取り組むのかを改めて考えていた。今日は午前中に、協働者の方とのオンラインミーティングがあるため、その前に早朝の作曲実践を終えておきたいと思う。ミーティング後から昼食まではまだ時間があるであろうから、その時間に過去の日記の編集を行っていく。過去の日記の編集に関しては、毎日20本ほ

どコンスタントに編集が進んでおり、とてもいい流れができています。この調子で編集を進めていけば、およそ90日後には、未編集の日記が全て無くなるだろう。未編集の日記が無くなってからは、20本の日記を書き終えた都度、編集をしていくのが良いだろう。

今日も昨日に引き続き、12音技法に関する書籍を読み進めていく。ちょうど昨夜、“Serialism: Cambridge Introductions to Music (2008)”の初読を終えた。一読目で全てを理解するのはどの書籍に対しても難しいが、今回の初読から12音技法に関する観点を随分と多く得られたと思う。それらのうち、直接的に作曲には役に立たないものもあるが、そうだとすると、そうした知識の一つ一つが、間接的には作曲技術をより深いものにしてくれると思う。

今日からは、12音技法に関するもう一冊の書籍、“Serial Music, Serial Aesthetics: Compositional Theory in Post-War Europe (2008)”の続きを読み進めていきたい。こちらもすでに数章ほど読んでおり、すでにいくつか重要な気づきをもたらしてくれている。本書に掲載されている具体例を頼りに、12音技法を活用した作曲を今日も実践したいと思う。上記の書籍を読むことに加えて、今日も辻邦生先生の日記を読み、ゴッホの手紙を読み進めていきたい。

学術書とそうではない書籍を読むことが、とても良いバランスで行われているように思う。いずれにせよ、それらは共に自己を深めてくれるものであることに変わりはない。

早朝の作曲実践に取り掛かろうとしたところ、ふと今朝方の夢の続きについて思い出した。実際に通っていた中学校の靴箱にいた時に、そういえば、二人の友人とそこで出会ったことを思い出したのである。二人の友人は、絵画を購入したいと私に述べ、絵画の選び方を私に教えて欲しいと言う。それを教えられるほど絵画に対して造詣は深くないのだが、絵画について話をしようと思ったら、私たち三人は画廊にいた。

そこで一人の友人が、作者不明の作品のレプリカを二つ持ってきた。それらのうち、どちらかを購入しようと思っているようだ。すると、もう一人の友人も一つの絵画作品を持ってきて、「この作品からほとばしるエネルギーがいいと思うんだ」と述べた。見ると、彼が手に持っていたのは、作者不明の作品の原画であった。私は二人の目の前で、「やっぱり原画は違うよ」と述べた。それを述べるまでも

なく、私たち三人は、一人の友人が手に持っている原画が生み出すエネルギーと迫真性を肌で感じていた。フローニンゲン:2019/1/14(月)07:30

No.1572: To a Lively Morning Market

I have a refreshing feeling when I go to a lively morning market. Groningen, 08:48, Tuesday, 1/15/2019

3677. 大自然に潜む隠れたコードと作曲

時刻は午後二時半を迎えた。これから午後の仕事に取り掛かりたい。

それにしても、今日は不思議な天気だ。午前中に、数分間ほど激しく雪が降った。それはみぞれ混じりの雪であり、強い風に煽られる形で、斜めに地上に降りつけていた。雪の多さと風の強さが相まって、時折、外の世界に白い波が押し寄せているかのようであった。そうした光景が数分間ほど続くと、空が突然明るくなった。それ以降は、時折太陽が顔をのぞかせるようになり、昼食前に買い物に出かけた際には、久しぶりに太陽の光を浴びることができた。仮眠を取る前後も、太陽の光が出ていたのだが、今は再び雲に隠れてしまっている。それでも、雲間から太陽が地上に差し込んでいる様子を見ることができ、その様子はとても美しい。薄黄色い光の筋が地上に降り注いでおり、それほどか恵みの光のカーテンのように見える。

今日はこれから、バッハに範を求めて作曲実践を行いたい。作曲実践を終えたら、辻邦生先生の日記の続きを読み進めていく。

オランダのこうした環境の中で過ごす際には、似たような環境で精神生活を営んでいた先人の言葉に対して深い共感の念を持つ。辻先生はフランスに住んでおられたため、お互いの生活拠点は異なるのだが、そこでの物理的環境と精神生活の有り様には随分と重なるものがあるかと思う。そうした点が、辻先生の日記を思わず読んでみたくなる気にさせるのだろう。

昨日は、作曲に関する専門書を探していた時に、バルトークの音楽を解説している興味深い書籍にであった。そのタイトルは、“Bela Bartok: An Analysis of His Music (2006)”というものだ。本書の概要を確認すると、今の自分にとって必要な一冊のように思えたので、昨夜、本書をイギリスの書店

に注文した。バルトークは、伝統的な調性のある曲を作りながらも、絶えず新たな作曲方法を模索しており、無調の曲を作っていた点や、独自の作曲体系を構築していた点に私は関心を持った。伝統的な形式に左右されるのではなく、新たな作曲システムを自ら構築していったバルトークにはやはり学ぶべきことが多々ある。

今から一年前に、ハンガリーを訪れた時、バルトーク博物館に足を運んだ際の記憶が蘇ってくる。バルトークもまた自然を愛する人であった。それは、博物館の中に所蔵されていた、蝶の剥製のコレクションを見てもわかるし、それ以外の所蔵品からも十分に伝わってくることであった。

なにやらバルトークは、大自然の成り立ちに着目し、自然現象の中に潜む黄金比などを積極的に自身の作曲に取り入れていたようだ。それを知って、ますますバルトークの作曲方法に関心を持った。黄金比を含め、私も、自然の摂理を作曲の中に活用していきたいと思う。それは今すぐに実現されるものではもちろんなく、これからの研究と研鑽によって、少しずつ実現されていくものだろう。

昨夜そのようなことを考えながら、書斎の本棚にある、“The Secret Code: The Mysterious Formula That Rules Art, Nature, and Science (2008)”という書籍を引っ張り出し、近いうちに再び読み返そうと思った。本書には懐かしい思い出があり、それは、本書をコペンハーゲンのニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館で購入したことだ。本書はまさに、自然の奥に潜む「隠されたコード」を取り扱っており、バルトークがそうしたコードを参考にして曲を作っていたように、私も本書から様々な着想を得ようと思う。フローニンゲン:2019/1/14(月)14:52

No.1573: A Cool and Jocular Little Bird

I saw a little bird perching on a tree in the garden. It looked cool and jocular. Our reality is always phlegmatic and droll. Groningen, 12:19, Tuesday, 1/15/2019

3678. 固有の時空間の12音技法

時刻は午後四時半を過ぎ、五時に向かっている。辺りはうつつすらと暗くなっており、夕日を眺めることはできず、空は寒々とした様子だ。今日も気がつけばこの時間帯を迎えており、午前中に協働者の方とのオンラインミーティングを行った以外は、全て自分の探究活動と創造活動に従事していた。

日記の編集も毎日着実に進んでいる。ようやく、昨年の今頃に執筆した日記を最近編集し始めている。

過去の日記を改めて読みながら思うのは、最終的には自分に救いをもたらすのは自分が書いた日記なのだということだった。自分が日々を懸命に生きていたことが今を生きることの支えになる。そのようなことを思わずにはられない。

過去の日記を読みながら、昨年の自分と今の自分を比べると、確かに両者の間に変化を認めることができる。こうした変化に気付けるのは、何よりも日記を書いていたからであろうし、そもそも、そうした変化が起きたのは、日記を絶えず綴っていたからだと思う。明日もまた、過去の日記を編集する中で、当時の自分から学びを得、それと同時に、当時の自分と今の自分の間にある差異に気付くであろう。

この日記を書き始めてわずか数分しか経っていないのだが、その間にも辺りの暗さは増した。今日もまた、冷たく暗い闇夜がやってくる。すでに師走は過ぎたが、人生は常に師走のような形で過ぎていくのかもしれない、ということ先ほど思っていた。それを象徴するように、今日の時間もあっという間に過ぎていった。

風のように早い日々の時間の流れ。あるいは、光ほどに早い時間の流れを実感する。このようにして冬が終わり、春がやってくるのだろう。

今日はこれから夕食までの時間を使って、12音技法に関する専門書の続きを読み進めていきたい。昨日も考えていたが、12音技法というのは、やはり特殊な音楽空間を持っているようであり、そうであるならば、特殊な音楽時間をそこに表現できるだろう。12音技法でしか表現し得ないような時空間を掴んでいきたいと思う。ここでも大事になってくるのは、やはり時空間という現象なのだ。それに関する哲学書を今後も継続的に読み進めていき、時空間に関する自分なりの考えと感覚を養っていく。それが実現されるようになってきて初めて、自分の曲の中に、固有の時空間の概念が滲み出していくだろう。

昨夜、12音技法が用いられた曲を聴いている時に、そこで表現されている時空間が、やはり調性のある音楽の時空間とは異なるものであることに気づいた。無調の曲は、どうやら時空間を変質させる

力を持っているようだ。逆に言えば、調性のある曲は、独自の方法で時空間を変質させていると捉えることもできる。いずれにせよ、仮に私たちが普段調性のある曲に慣らされているのであれば、それは調性のある曲に固有の時空間に慣らされていることを意味する。

ようやく、12音技法で作られた曲の中に、いくつか美しいと思えるものが見つかり始めている。これは自分にとって大きな前進である。その美の出处に着目し、それを育てていく必要がある。また、実験的に12音技法の曲を少しずつ作っていくことによって、未だ開けられることのない時空間の感覚を開いていきたいと思う。フローニンゲン:2019/1/14(月) 16:57

No.1574: A Misty Rain at Dusk

I'm looking at a misty rain at dusk. The more I look at it, the subtler my sense becomes.

Groningen, 16:37, Tuesday, 1/15/2019

3679. 教育と創造

今日も一日がゆっくりと終わりに近づいている。日記を少し書き留めたら、本日を締めくくる作曲実践を始めたい。

夕食を摂っている時にふと、過去に創造に次ぐ創造を成し遂げた偉大な芸術家は、正規の教育を受けていないか、正規の教育を忌避していた傾向にあるのではないかとふと思った。作曲に関して創造に次ぐ創造を成し遂げたのは、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンなどがすぐに思いつき、もちろんその他にも列挙したい作曲家はいたのだが、彼らが正規の教育をどれほど受けていたのかについて改めて調べてみた。もちろん、三人とも音楽に関する教育を身内の人間なりから受けていることは確かであるが、学術機関のような場所で音楽を学んでいるわけではないようであった。

絵画の世界においては、ゴッホやピカソの名前がすぐに思い浮かび、ゴッホについては正規の教育を一切受けておらず、ピカソに関しては美術学校に通ってはいるものの、16歳の時には学術機関のような場所で絵画を学ぶことに見切りをつけ、退学をしている。

もちろん、学術機関のような場所で正規の教育を受けたにもかかわらず、創造に次ぐ創造を実現させた芸術家はいるのだろうが、それを実現させるのは以外と難しいのではないかと考えた。そのよう

なことを考えていると、下手をすると学術機関のような場所で創造行為に関する事柄を学ぶと、想像力と創造力が枯渇してしまう現象が起こるのではないかと考えていた。おそらく、芸術に関する学術機関というのは、過去に成し遂げられた事柄を理論化し、それを伝えていくことに重きが置かれており、それがもしかしたら、創造に次ぐ創造を実現させるエネルギーを抑圧してしまうのかもしれない。

私は現代の作曲家や画家をほとんど知らないので、これはあくまでも直感的なものだが、現代において、創造に次ぐ創造を実現させている芸術家が少ないのは、彼らは一様に、学術機関において正規の教育を受け、創造エネルギーが抑圧されてしまったからなのではないかと思う。

当然ながら、こうした抑圧されたエネルギーを再度解放することが、おそらく本物の芸術家なのだと思うが、一度抑圧されたものを解放することは以外に難しいのかもしれない。創造行為に関して爆発をしている芸術家をあまり見かけないこの現代社会において、芸術教育の意味と方法について改めて考えさせられる。

これから作曲実践を始める前に最後に書き留めておきたいのは、時空間に関する理解を深めていくことは、それと不可避な関わり合いを持つ音楽に関する理解を深め、時空間の中に生きる人間存在に対する理解を深めていくことにもつながる、ということである。これは夕食前に芽生えた考えだ。

近いうちに、ハイデガーの“Being and Time”を読み進めていきたい。もはや、人間発達の探究と音楽の探究は何一つ境目のないものになりつつある。そもそも最初から、両者は密接な関係を持つ主題なのだとすら思うようになっている。音楽の探究は人間発達の探究につながり、逆もまた然りである。また、哲学を学ぶことは、音楽と人間発達に関する理解を深めていく。今、それらの密接なつながりが見え始めている。それでは、それら三つを統合的に探究して行った先に何が待っているのか、何が見えるのかに関しては、今の私にはわからない。だが、そこにはきっと何かがありそうだ。フローニンゲン:2019/1/14(月)20:01

3680. 就職しようとする友人に関する夢

今朝は六時前に起床し、六時半を迎える前に一日の活動を始めた。新たな週を迎えて二日目となる火曜日が始まった。

辺りは静寂に包まれており、平穏な闇の世界が外に広がっている。起床直後に一日分のお茶を入れ、今はその一杯目を飲みながら、リラックスしてこの日記を綴っている。

いつものように、今朝方の夢についてまず振り返っておきたい。夢の中で私は、日本のある旅館に宿泊していた。何人かの幼馴染と一緒にその旅館に宿泊し、旧交を温めていた。友人のうちの一人は、小学校三年生の時に広島から引っ越してきた人物であり、彼は今、米国の大学の博士課程に在籍している。

彼は数学の博士号を取得することに情熱を注いでいたのだが、博士号を取得したら、戦略系のコンサルティング会社か投資銀行に就職する予定のようだ。他の友人がその友人にあれこれ質問することを通じて、私は、彼がどのような理由でそうした判断をしたのかを理解しようとしていた。

彼の説明を聞けば聞くほどに、就職しようとする理由が浅薄なものに思え、私は彼に幻滅をしてしまった。彼が就職しようとする理由はあまりに浅薄なものであり、彼が一通り話し終わると、私は彼の元に行き、彼の顔を引っ叩き、何回か殴った。彼は啞然としていたが、彼の顔を最後に殴った時に、「・・・親友だと思っていたのに」という言葉が私の口から漏れ、その言葉に対して彼はどこか神妙な表情を浮かべていた。

私はその場を去り、後々話を聞くと、彼は結局、当初の通り、コンサルティング会社に就職することにしたようだ。私が指摘した安直さに対しては、彼なりの言い分があるようだったが、話しに聞くと、その内容もとても浅薄だった。やはり私は、彼が企業に就職する道を選んだことを残念がっているようだった。

気がつくと、私はあるオフィスビルのエスカレーターを下っていた。そこは、以前私が働いていた会社が入っているビルであり、同時に、その友人がこれから働く会社が入っているビルでもあった。エスカレーターを降り、二つのエレベーターホールのうち、左側のエレベーターホールに向かい、そこで一台のエレベーターに乗った。私は彼が働こうとしている会社の様子を見に行くためか、その会社がある三階の押しボタンを押した。

三階に到着する瞬間、エレベーターの移動に伴う重力で、私の体は宙に浮かんでしまい、三階でエレベーターのドアが開いたとき、私は宙から外に着地するような格好になった。すると、ドアの前

で待っていた男性がとても驚いた表情を見せた。私はその方に、「エレベーターの重力でつい宙に浮いてしまっ」と笑いながら一言述べた。

三階に到着して、彼が働く予定の会社に向かおうとしていると、別の会社の前に、見慣れた顔があった。そこには、高校時代の友人(HH)がいたのである。彼を見つけて私は嬉しくなり、思わず話しかけた。彼は驚いた表情を見せながらも、偶然の再会をお互いに喜んだ。

どうやら彼は、彼が今立っている後ろの会社で働いているようであり、今は店の前で営業をしているようだった。見ると、彼が働いている会社は旅行代理店のようである。その友人の格好はとても派手で、どこかハワイ風な感じがした。自分も以前はこのビルの反対側のオフィスで働いていたことを友人に告げ、時間があつたらご飯でも食べようと述べた。すると、友人は嬉しそうな表情を浮かべた。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/15(火)06:46

No.1575: Celebration for Tomorrow

It stopped drizzling. The outside world becomes peaceful as if it were celebrating for tomorrow. The intrinsic tranquillity of darkness generates such an atmosphere. Groningen, 21:24, Tuesday, 1/15/2019